

【算数科】

1 昨年度の授業改善推進プランの検証・評価

- 習熟度別指導の特性を生かし、習熟度に合った教材や支援の方法を取り入れ、児童の学習状況を見取り、基礎的・基本的な学習内容の定着に活かした。
- 問題解決学習の流れに沿った指導に取り組むよう学習計画を立て、習熟度に合った課題に取り組ませた。
- △文章から情報を読み取り立式したり、式が表す意味を考えたりする問題解決は、昨年度同様課題がある。

2 今年度の調査結果の分析と結果に基づく課題

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
調査結果の分析	知識・技能については、どの学年も目標値及び全国、区の平均正答率を上回った。 しかし、校内の昨年度の平均正答率と比較すると、4・6年生は低下が見られる。項目ごとに見ると、4年生はすべての項目で、6年「小数の計算」で下回っていた。	思考・判断・表現については、どの学年も目標値及び全国、区の平均正答率を上回っていた。 しかし、校内の昨年度との平均正答率と比較すると、4年生と6年生は低下が見られる。	主体的に学習に取り組む態度については、どの学年も目標値及び全国、区の平均正答率を上回っていた。 しかし、校内の昨年度の結果と比較すると、4年生は低下が見られる。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の学年で、式が表す意味を問われる問題の正答率が低い。また、文章から状況を読み取り、立式するなど、知識を活用することに課題がある。 ・4年生は「円と球・三角形」、5年生は、「角の大きさ」、6年生は、「立体と体積」など、図形に関する問題の正答率が低い。 		

3 授業の具体的な改善策

教科目標	<p>学習指導要領の教科の目標</p> <p>数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 数量や図形などについての基礎的・基本的な概念や性質などを理解するとともに、日常の事象を数理的に処理する技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 日常の事象を数理的に捉え見通しをもち筋道を立てて考察する力、基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見だし統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表したり目的に応じて柔軟に表したりする力を養う。</p> <p>(3) 数学的活動の楽しさや数学のよさに気付き、学習を振り返ってよりよく問題解決しようとする態度、算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度を養う。</p>
全体	<p>主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善</p> <p>既習の内容を生かし問題解決学習の流れを身に付ける。筋道を立てて考えたり説明したりする資質能力を育成するために、自分の考えを発言したり、友達の考えを聞いたりして、より考えを深める学習を進める。また、児童が問題を解決したいと意欲を喚起させる発問や教材提示などを工夫する。</p>
学年段階別改善策	
低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・長さや水のかさ等、身の回りの量を扱う単元では、身の回りのものの直接あるいは間接的な大きさを比べる活動を通して、量の単位や測定の意味について理解を深められるようにする。 ・数や時間の概念を定着させるために、具体物等を用いて、理解できるようにする。 ・計算の基本となるたし算やひき算、かけ算九九は、繰り返し学習し、知識の着実な定着を図る。 ・タブレットPCを活用して、算数ステップアップ学習を確実に実施できるようにする。既習の単元のたしかめテストでは、正答率が80%以上になるまで取り組む。その後、たしかめプリントで60%以上の児童は、チャレンジプリント、60%以下の児童は、フォローアッププリントに取り組み、学力の向上を図る。
中高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しをもつ→自力解決（絵、図、式、言葉等）→友達と考え方の交流→全体の交流→検討→適用問題という、問題解決の流れを四則計算や面積の問題の場面で取り入れ、筋道を立てて論理的に考える力を身に付ける。 ・児童に、友達が考えた式の意味を説明させる場面を設け、式が表す意味を理解する力が身に付くようにする。 ・児童の思考に、具体的に表現できているか、今までの学習を活用しているか、簡潔に表現できているかなど様々な視点から価値付けることで、異なる考え方を取り入れる良さをさらに感じられるようにする。 ・コンパス・分度器等、道具を扱う単元では、習熟度に応じて、基礎的な使用方法を確認する時間を取り、道具を使用する技能を高める。 ・タブレットPCを活用して、算数ステップアップ学習を確実に実施できるようにする。（既習の単元のたしかめプリントでは、正答率が80%以上になるまで取り組む。その後、たしかめプリントで60%以上の児童は、チャレンジプリント、60%以下の児童は、フォローアッププリントに取り組み、学力の向上を図る。